

ノッティングヒル・カーニバルの  
仮装芸術が語る「アフリカ」

木村葉子\*

“Africa” in the Masquerade Arts of the Notting Hill Carnival

KIMURA Yoko

This article examines how “Africa” is expressed in the masquerade arts in the Notting Hill Carnival, one of the biggest festivals in the United Kingdom in which most of the participants are West Indians. Four case studies are based on my own observation in my field work of 2004, 2005 and 2006. The “Africa” thus expressed is a kind of “Imagined Community” (Benedict Anderson), and through Notting Hill Carnival a symbolic unity is realized between West Indians and migrated African people, each of whom now constitutes one percent of the whole population of the United Kingdom.

キーワード

仮装芸術、マスバンド、「アフリカ」、「想像の共同体」

はじめに

本稿の目的は毎年8月の終わりにロンドンで行われるノッティングヒル・カーニバルの仮装パレードにおいて「アフリカ」がどのように表現されているかについて考察することにある。「アフリカ」が仮装芸術に表現されている例として、1993年のカール・ガブリエルの作品、「部族芸術 (TRIBAL ARTS)」を紹介するとともに、2004年、2005年、2006年の8月から9月にかけて筆者が行ったフィールド・ワーク調査から4つのマスバンドの事例をもとに、カーニバルで伝えようとする「アフリカ」がどのような意味を有しているかを検証する。

I. ノッティングヒル・カーニバルの仮装パレード

ノッティングヒル・カーニバルは、8月の最終日曜と月曜の二日間の連休に、約百万人の観客を動員する英国で最大規模の祝祭である。このカーニバルの中心のひとつがロンドンの街をカリブの世界に変貌させる仮装パレードである。仮装パレードは、カーニバル両日の午後から夜まで、ロンドンの中心部ノッティングヒルの住宅地にある全長4.9キロ（整列道路もふくめると6.4キロ）の生

\*名古屋大学大学院文学研究科博士後期課程

活道路で行われる。色鮮やかな仮装コスチュームを身につけパレードするマスカレーダーの多くは、天性のリズム感と芸術感覚を持つ躍動美あふれるアフリカ系カリブ人「ウエスト・インディアン」の若い女性である。

「ウエスト・インディアン」とは、カリブ海に弧状にならぶ島々は西インド諸島（ウエスト・インディーズ）に住む人たちの呼称である。ウエスト・インディアンの大半をしめるアフリカ系は、大西洋奴隷貿易で西アフリカ各地から西インド諸島の砂糖プランテーションに売られた奴隷の子孫である。

1948年、ジャマイカを中心に1万人のウエスト・インディアンをのせたSSウインドラッシュ号がサザンプトン港に入港して以来（Sewell 1998: 1）、1950年代、60年代にかけて、多くのアフリカ系ウエスト・インディアンが移民として英国に渡った。現在では英国で生まれた第二、第三、第四世代を含めて、英国でウエスト・インディアンと呼ばれる人達は全人口の約1%をしめている。

このようなウエスト・インディアンがカーニバルで大音響のソカに合わせて踊る踊りは、静かな英国のイメージの対極にある「アフリカ」の踊りである。膝をななめに曲げて腰を落として前に突き出し、摺り足で小刻みに歩きながら踊る。腰をゆっくりとスイングさせながら、時に烈しく回転させ、他のマスカレーダーと腰と腰を擦りつけあっていく。

西インド諸島の砂糖プランテーションでは、踊りとは奴隷にとって数少ない娯楽であるうえに、歌や踊りが奴隷の労働効率を高めたので、農園主も踊りを利益と生産性を上げる手段としていた（アンチオーブ 2001:171-173）。こうしてはぐくまれた踊りは、遠藤保子が指摘するように、「どうしても踊らずにはいられない」という積極性があり、人々の生活になくてはならないリビング・アートであり、言語以上に雄弁に語りかける非言語コミュニケーションの手段であり、さまざまな気持ち、感情、神に対するさまざまな祈りや感謝の心を表現する方法である（遠藤 2001: 59）。

仮装パレードにコスチュームを身につけて参加するマスカレーダーは、「マスバンド」とよばれるチームに所属している。カーニバルに参加するマスバンドの大半はウエスト・インディアン主導型で、仮装コスチュームを製作し、カーニバルに参加して、チームとして競いあう。二日間のカーニバルでは、一日目の日曜日が子供達中心のパレードになり、二日目の月曜日が大人も子供も参加するメインのパレードである。マスバンドでは大人だけでなく、子供たちの仮装コスチュームも製作され、中には子供のコスチュームだけを製作するマスバンドもある。

仮装コスチュームは二種類に大別される。一つは仮装パレードでマスカレーダーが着用する仮装コスチュームで、もう一つは「クイーン」や「キング」、「フィーメール・インディヴィデュアル（女性の個人）」、「メール・インディヴィデュアル（男性の個人）」といった特別に製作される大型の衣装である。ときには3メートルを越すものや移動のために車輪をつけるものなど、豪華さとインパクトの強さをうちだす衣装である。このような特別の衣装は、西アフリカで仮面が極秘に製作される伝統に基づいて、マスバンドの中心メンバーだけで製作され、仮装コスチュームのコンテスト「グランド・カーニバル・コスチューム・スプラッシュ<sup>2</sup>」まで秘密にされる。こうした衣装の制作費は何十万円もかかることがあるため、マスバンドの中でも特別衣装を製作するものは20余りである。「グランド・カーニバル・コスチューム・スプラッシュ」では、各マスバンドが音楽に合わ

せて「クイーン」や「キング」などの仮装コスチュームを審査員の前で披露する。ステージには豪華な衣装が次々にあられ、壮大なスペクタクルが展開される。この競技会は往時に比べると観客数が減ったといわれるが、千人あまりの観客の大半がウエスト・インディアンで、トリニダード系が多い。コンテストは二日にわたり、一日目が子供の、二日目が大人の仮装コスチュームを対象に、特別な大型衣装が種類別に審査される。現在は入賞しても賞金を得ることはできないが、マスバンドのメンバーは、「クイーン」や「キング」の衣装の製作に命をかけるほど真剣にとりくむ。「クイーン」や「キング」の衣装で入賞するマスバンドは芸術評価が高く、中心的な位置を占めている。

ノッティングヒル・カーニバルでそれぞれのマスバンドが一年の歳月をかけて目指すものが「マスバンド・オン・ザ・ロード」のコンテストで、カーニバル二日目の午後にカーニバル・ルートであるグレート・ウエスタン・ロードの審査員席の前で行われる。特別な仮装コスチュームとマスカレーダーの仮装コスチュームが混成し、ノッティングヒルのストリートを舞台に華麗なパフォーマンスが披露され、カーニバルにおける最高のタイトル「バンド・オブ・ザ・イヤー」を獲得するためにどのマスバンドも鎬をけずりあう。

ノッティングヒルのストリートを舞台とする一連の芸術を創造するためには、テーマが重要な役割を果たす。マスバンドのテーマは一年ごとに、あるいは何年かのプロジェクトとして決められ、それによって仮装コスチュームの製作やストリート・パフォーマンスの演出が設定される。

アブナー・コーエンはマスバンドのテーマについて以下のように記述している。「幅広い範疇で何百とあり、アフリカ、カリブ、ヨーロッパ、聖書、歴史、船乗り、宇宙、神話といった深い意味をもつものや森、鳥、蝶、宇宙旅行、虹、自然のファンタジーなどのエキゾチックなものもあるのが特徴である。例えば『古代エジプト』というテーマは洗練されたアフリカの文明を表し、エキゾチックでもあり、深い意味をもつものでもある。(多くのウエスト・インディアンはアフリカが人類文明の発祥地であるのに、白人歴史家が故意に事実を隠蔽していると信じている。) アメリカ・インディアンに関するテーマは、カラフルでエキゾチックな仮装衣装となり、白人支配に対する苦闘を強調するイデオロギーと密接に関わることから人気のあるテーマである。」

仮装コスチュームには、芸術的な美を追求する「プリティ・マス」の側面とその背後にある深い意味を追求する「シリアス・マス」の側面の両方が求められ、それらが融合した芸術を生みだすのが成功したマスバンドである(Cohen 1993: 103-104)。テーマには社会的な風刺をこめた意味をもたせつつ、観客の注意をひくよう奇抜に、エキゾチックに、面白く表現されることが要求される。

現代のマスバンドのテーマの中で最も多くみられたものは「アフリカ」に関するもので、2005年を例とすると、ジェネシス・マスバンドの「アフリカン・ルネッサンス：三部作 第一部」、マンガローブの「アフリカに帰る」、パイオニアとその子孫の「サファリ」、トリニダード・トバゴ・カーニバル・クラブの「部族」、ピープルズ・マスバンド・ユニティの「踊りの世界」、パディントン・アーツ・エリムーの「アフリカルーツ (Roots) ールート (Routes)」などである。ではマスバンドがうみだす仮装芸術において、「アフリカ」がどのように表現されているかについて以下の章で考察してみたい。

## II. カール・ガブリエルの「部族芸術 (TRIBAL ARTS)」

マスバンドが製作する仮装芸術は、バンドリーダーとコスチューム・デザイナーを中心に生みだされる。コスチューム・デザイナーの中にはカーニバルですぐれた芸術作品を製作することにより、カーニバル・アーティストとしての地位を確立する者もいる。その代表的なアーティストにカール・ガブリエル<sup>3</sup>がいる。ガブリエルはトリニダードで生まれ、1964年にロンドンに渡り、英国で教育を受けた。彼の技法の特徴は3D (ディメンション) 技法と呼ばれる立体技法で、まず竹やワイヤーで立体のフレームをつくり、そこに薄葉紙やポリ酢酸ビニル (PBA) を貼りつけ、そのうえに彩色していくものである。ガブリエルがバンドリーダーでコスチューム・デザイナーでもあったミスティ・カーニバルクラブの1993年の作品、「部族芸術 (TRIBAL ARTS)」や2002年にセント・クレメント・アンド・セント・ジェームズ・カーニバル・バンドを技術指導したときの「海底」はとりわけ評価が高い。このガブリエルの仮装芸術が何を意味するのか、パトリシア・アレンネ＝ディトマス (1997) が彼の作品「部族芸術 (TRIBAL ARTS)」を例に分析しているので、これをまず紹介しよう。

ガブリエルが描く「部族芸術」とは、アフリカの部族の仮面に誕生から成熟、そして死によって完成にいたる自然のリズムを表象したものであるという。アフリカを美学的に表象することはアフリカの部族の伝統における仮面の重要性を表現するだけでなく、植民地化により破壊されたアフリカの真の姿を再現するという意味もある。このためにガブリエルは、マスバンドで製作される仮装コスチュームを4つのセクションに分類し、アフリカの4つの地域に伝わる仮面文化を表現した。

第一のセクションでは、政治的危機を経験したツチ族をシンプルな白と黒の衣装で表現している。ツチ族のコスチュームを身につけたマスカレーダー達は、「インディヴィデュアル」とよばれる特別の大型コスチュームを身につけたマスカレーダーに先導されてパレードするが、第1セクションの「インディヴィデュアル」のコスチュームは、クバ族の割礼の儀礼で用いる仮面の衣装をデザインしたものであるという。

第二のセクションでは、カメルーン共和国の森林地帯のドゥアラ族のすでに消滅した仮面文化を復活させる。中心となる「インディヴィデュアル」の仮装コスチュームでは、頭部に黒、オレンジ色、白の三色を用いて、シマウマと角のあるロバがかけあわさったような形の古代の動物を表現した。その他のマスカレーダー達も、同じ三角形の模様をついたコスチュームを着用する。このセクションでは、消滅したドゥアラ族の仮面文化を鮮やかな色を使ってアピールし、世界的な都市ロンドンで復活させることにより、アフリカ系カリブ人の心理社会的な精神的高揚をもたらせるアフリカの遺産の価値をみいだそうとする。

第三のセクションでは、大型の特別衣装、「キング」の仮装コスチュームが中心である。そのコスチュームは、アイヴォリー・コースト (象牙海岸) のンゲレ・ウォブ族と思われる部族が割礼のときに用いる二元性をもった仮面である。この部族にとって、仮面とは死者と生きている者を媒介するものである。洗練されたスタイルとグロテスクでキュビズム風のスタイルという2つの極端に異なった仮装コスチュームがこのセクションの特色である。

第四のセクションは、マスバンドが創作する中で最も大切な大型特別衣装である「クイーン」のコスチュームが中心である。キングの衣装を製作しないマスバンドもあるが、クイーンの衣装はどのマスバンドでも最も力をこめて製作し、マスバンドのテーマを表現する。ガブリエルの「部族芸術」では、大人用と子供用のコスチュームで二つのクイーンの特別衣装が製作された。子供のコスチュームのクイーンは、ガボン共和国の死者の仮面「オシエバ (Osyebe)」から発想をえたものである。この社会では芸術は死や死者の霊をなだめる儀礼と結びついている。

「部族芸術」の中で最も大切なコスチュームは大人が着るクイーン的大型特別衣装で、アフリカン・マザーを表現したものである。アフリカン・マザーは生命の血であり、村をまとめる人として演出される。アフリカン・マザーは出産を手伝うことで村に新しい命をもたらす重要な存在である。そうしたアフリカン・マザーを表現するクイーンのコスチュームはどのコスチュームよりも大きい。

このようにガブリエルはアフリカを寓話化し、アフリカの「ルネッサンス」というダイナミックな構想をもって仮装コスチュームを製作した。ロンドンという都市で、カーニバルを通じて「アフリカ」が再生され、カーニバルという短い時間においてマージナルな人達の力が発揮される。そしてこの「アフリカ」は、ノッティングヒルのストリートでマスカレーダーが仮装コスチュームを着て踊ってクライマックスを迎えるときに参加者に体感される「想像の共同体」なのである (Alleyne=Dettmers 1997 : 169-178)。

### III 現代のマスバンドが描く「アフリカ」

では2004年から2006年にかけて筆者が調査した以下の4つのマスバンドの事例において、「部族芸術」にみられたような「アフリカ」がどのように表象されているかこの章で論じてみたい。

1. マホガニー・カーニバル (ブレント区ハールデン)
2. パディントン・アーツ・エリム (ウエストミンスター区パディントン)
3. フラミンゴ・カーニバル・アーツ (ブレント区サウス・キルバーン)
4. サウス・コネクションズ (ランベス区オーバル)

この4つのマスバンドは、「グラウンド・カーニバル・コスチューム・スプラッシュ」での入賞経験が多く、芸術性が高い、中心的な位置をしめるマスバンドである。これらのマスバンドの位置とノッティングヒル・カーニバルのカーニバル・ルートをロンドンの行政区別の地図に表わしたものが図3-1である。

#### 1. マホガニー・カーニバルの「アフローアジアナーエキスピリエンス」

ロンドンの中で最もエスニック人口が多いブレント区ハールデンのハイストリートに店をかまえるマホガニー・カーニバルは最も影響力の大きいマスバンドの一つである。トリニダード出身のバンドリーダーのマイケル・ランディーム、コスチューム・デザイナーのクレアリー・サランディー夫妻とその家族を中心に、多くの若者をマスバンドの活動を通して育成し、カーニバルを大きなビジネスとしている。1978年にトリニダードからロンドンに来て芸術活動を始めたクレアリーに対

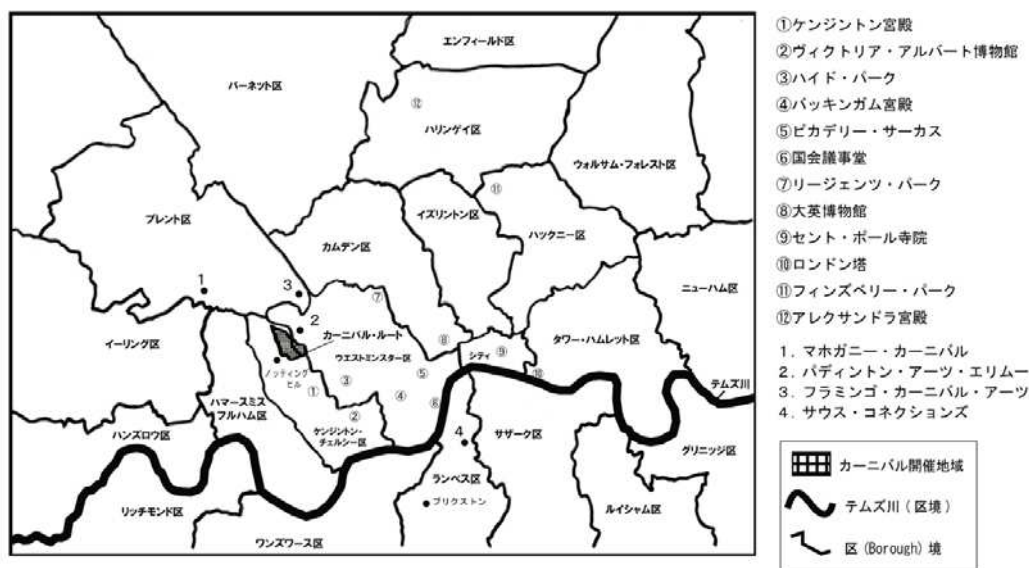


図 3-1 ロンドンの行政区別地図におけるカーニバル・ルートと4つのマスバンドの位置

する評判はとりわけ高く、ノッティングヒル・カーニバルだけでなく、ロンドンのミレニアム・パレードや恒例のロンドン市長のパレードなど英国における大きなイベントをはじめとして、シンガポールのミレニアム・ショーなど海外でのプロジェクトも手がける。

クレーターは「アフリカ」をテーマにこれまで数々の作品を生み出してきた。2004年のノッティングヒル・カーニバルのテーマ「アフロアジアン・エクスペリエンス」ではアフリカに住むライオン、シマウマ、キリンなどの動物を立体技法でみごとに表現した。「キング」の仮装コスチュームではマサイ族のエウノトとよばれる年齢階梯儀礼において、ライオンを殺す儀礼で用いる「盾」を象徴的に描いている。この儀礼は「イルキリアニ(下級青年)」から「イルモリジョ(上級青年)」へ昇級するための儀礼で、白い牛が用いられ、将来の妻も決められる(サンカン 1989: 54-57)。

ライオンを殺す儀礼は、エウノトのなかでも9年か10年に一度行われる特別な儀礼である。近年ではケニアの近代化やライオンの保護などの理由で、1987年の儀礼が最後になったようである。この儀礼ではライオンのたてがみで作られた頭飾りをつけた男たちが槍と刀でライオンを屠殺し、そこに長老達が「盾」をもって現れ、儀礼の場を練り歩く<sup>4</sup>。クレーターは、この「盾」を白と黒で象徴的に再現し、「キング」の衣装としている。

## 2. パディントン・アーツ・エリムーの「アフリカルーツ(Roots)ールート(route)」

1979年に創設されたマスバンド、パディントン・アーツ・エリムーは、古くからの伝統を持ち、芸術性が高く、中心的な位置を占めるマスバンドである。ロンドンの中心部より北西にあるパディントン地区にあるパディントン・アーツセンターを拠点にしたコミュニティ活動とエリムー・マスバンドが複合している。



写真1 マサイ族のエウノト儀礼のライオンを殺す  
儀礼で用いる「盾」を表現した仮装衣装



写真2 マホガニー・カーニバルが表現する  
アフリカの動物

2005年にこのマスバンドの芸術部門を担当したのが、キネティカ・アーツのグループである。キネティカ・アーツとは動く美術であり、動力や光の効果などによる動きを基調とする芸術である。ロンドンのキネティカ・アーツのグループは、インド人の夫をもつ白人英国人女性アリ・プリティが1980年に設立したコミュニティ・アートの専門家集団で、英国全土のカーニバルやイベントを中心に展開する。アーティストの中にはカール・ガブリエルも含まれ、2005年のパディントン・アーツ・エリムーでは7人のトリニダード系の若手アーティストが活躍した。

パディントン・アーツ・エリムーの2007年までの3年間のプロジェクトのテーマは「自由への道」で、2005年のテーマは「アフリカルーツ (Roots) ー道 (Routes)」である。このプロジェクトの目的は、政治的表現の変化や形態についてカーニバルの芸術をとおして探求するものあり、トリニダードや英国のカーニバルの発展を形成した多様な文化の影響を提示することである。「自由への道」では、ノッティングヒル・カーニバルをふくむ全てのカリビアン・カーニバルの礎になったトリニダード・カーニバルが、奴隷解放からいかにして生み出され、仮装コスチューム、音楽、踊りなどがいかにアフリカの影響を受けてきたかを示すものである。

「自由への道」ではいくつかの旗を通して「物語」を構築する。この旗はアサフォ・ファンティの旗からイメージを取り入れたもので、旗の柄の先に「アディンクラ」を描いた。「アサフォ」とはアシャンティ連合王国時代の政治軍事機構で、「アサフォ・ファンティ」とはファンティ族のアサフォを意味する。「アサフォ・ファンティの旗」はファンティの人々によって作られた縦3フィート横5フィートの旗である。アサフォの旗には、歴史的なできごと、神話、儀礼、聖地、英雄などが象徴的に描かれ、それによってアサフォ組織の結束力や持続力を高めた。アサフォ・ファンティの旗ではこうしたシンボルをアップリケや刺繍で表現している<sup>5</sup>。

「アディンクラ」とは、アシャンティ族が発達させてきたこのような象徴的な意味をもつデザインであり (ルギラ 2004: 20)、ガーナおよびコート・ディヴオアールにまたがる地域、ギャマン

ノッティングヒル・カーニバルの仮装芸術が語る「アフリカ」

(Gyaman)の王であるコフィ・アディンクラの名に由来している。コフィ・アディンクラはアシャンティ王国の王権の象徴である黄金の床机<sup>6</sup>をまねて、コフィ・アディンクラの椅子を作った。アシャンティ族は王権を冒瀆する行為に対して戦争をしかけ、ギヤマンの人々を打ち負かし、コフィ・アディンクラを殺した。アシャンティ族はコフィ・アディンクラの椅子とそれを作った職人を連れて帰り、この戦勝品としての椅子から、アディンクラのシンボルを得た。

アディンクラとは伝統的に別れを意味する言葉で、誰かが死んだときや遠くに行くときに、アディンクラの布が用いられた。布に刺繍したり、型押し技法でアディンクラのシンボルが描かれ、現在でもガーナで用いられている (Fosu 2001: 10-11)。ロンドンのカーニバルではサテンやオーガンドイーなどの薄手の生地シルクスクリーンの技法でアディンクラのシンボルを表現した。パディントン・アーツ・エリムが2005年のノッティングヒル・カーニバルで、仮装コスチュームのセクションとして提示した7つの「アディンクラ」とそのカーニバルにおける意味は、表3-1に示すとおりである。

### 3. フラミンゴ・カーニバル・アーツの「エッセンス・オブ・アフリカ」

フラミンゴ・カーニバル・アーツは、ブレント区のサウス・キルバーンのカウンシル・ハウスがならぶ地域にある。セントルシア出身のマーサ・ファブリエは、この地区に多く居住するシングル・マザーや低所得層のマイノリティの子供たちをカーニバルの環境で育てたいという願いからマスバンドの活動を始めた。


2006年のテーマ「エッセンス・オブ・アフリカ」は、マーサが前年にナイジェリアのアブジャ・カーニバルにオーガナイザーとして参加した経験からひらめいたものである。クイーンの衣装ではアシャンティ帝国の皇太后「ヤア・アサンテワ」を提示する。ヤア・アサンテワは、20世紀の初頭、ゴールド・コーストを支配していた英国が、アシャンティ陥落を図った際、英国軍に対して、自ら戦士の衣装をまとい、ライフルをもって戦いに挑んだ女王である。1900年ゴールド・コースト総督フレデリック・ホジソンが、アシャンティの王権の象徴となっていた黄金の床几 (Golden Stool) に座ろうとしたことから、ヤア・アサンテワ戦争が起きたという (宮本 1997: 423-430)。ヤア・アサンテワの功績は、祖国の勇者あるいは女性解放運動の先駆者として讃えられ、ノッティングヒル・カーニバルや英国の黒人芸術で表現されることが多い。

フラミンゴ・カーニバル・アーツのキングのコスチュームでは、エジプトのトトメス三世やヌビア<sup>7</sup>の王、モシヨエシヨエが描かれている。子供のセクションでは、アフリカに生息する動物、ライオン、キリン、シマウマ、サル、ガゼル、ワニそれに絶滅の危機にあるフィッシュ・イーグルをアフリカン・プリントの布を使って仮装コスチュームとして製作する。

「エッセンス・オブ・アフリカ」はすべてのアフリカを対象にしている。マーサがこの仮装芸術で最も強調したかったのは、ファンティ族のフェティシズム、すなわち呪物 (フェティシュ) 崇拜である。ファンティ族の多産や家の繁栄を祈願する儀礼において使用される仮面や霊が宿っているとされる超自然的な力を持つ呪物をイメージ化してとらえ、「イメージの混合」として仮装コスチュームに新たな形でうみだしている。



表 3-1 「パディントン・アーツ・エリム」が描く「アディンクラ」の意味

	アディンクラ	名前	ノッティングヒル・カーニバルでの意味
1		Aya (シダ)	この言葉は「私はあなたを恐れない」という意味であり、抵抗のシンボルを表している。
2		Nkyimkylm (人生の改革)	イニシアティブやダイナミズムを表す。多くの役割をにない、多方面へ才能を発揮することを表現する。
3		Sepow (言論の自由)	この衣装のセクションではハイチの奴隷の反乱を指揮し、独立闘争の先駆となったトゥーサン・ルーヴェルチュールを追悼する。
4		Epa (手錠)	捕囚と奴隷制度。船員を表わす仮装衣装のセクションでは、アフリカからカリブ諸島への旅程を表現している。
5		Nsoromma (星)	神の子供を表わす。マンデラの時代から未来をになう世代へ。このセクションは「貧困の歴史」のキャンペーンを記念している。
6		Funtumfunafu Denkyemfunafu (多様性の統一)	このセクションでは、様々な文化的な背景をもった人たちが一つの目標を目指すときに統合する必要性があることを表現する。
7		Ako-ben (戦争のラッパ)	忠誠心と献身を表わす。アンゴラのンジンガやガーナのヤア・アサンテワのように王国を守ったアフリカ女性の勇敢さを讃える。

< 2005 年のパディントン・アーツ・エリムでの調査、Adinkra Symbolis m (1969) による >



写真3 ファンティ族のフェティシズムから  
イメージ化された犬の霊



写真4 フラミンゴ・カーニバル・アーツが  
表現するアフリカの動物

#### 4. サウス・コネクションズの「アスペクツ・オブ・アフリカ」

サウス・コネクションズは、トリニダード出身のアヴィオン・ムックラムの家族三世代を中心に発展した代表的なマスバンドである。テムズ川南岸のランベス区はウエスト・インディアン的人口が全人口の10%以上を占めるものの、ノッティングヒル・カーニバルのマスバンド数はテムズ川北岸にくらべると極めて少なく、サウス・コネクションズはこの地区のカーニバル文化の中心的な役割を果たしている。

フラミンゴ・カーニバルアーツのマーサと同じように、ナイジェリアのアブジャ・カーニバルにオーガナイザーとして参加したアヴィオンも2006年のカーニバルのテーマとして「アフリカ」を選んだ。サウス・コネクションズではトリニダード出身の新進気鋭のコスチューム・デザイナー、ショーン・キャリントンが「アフリカ」のアイデアをイメージ化して仮装コスチュームとして製作した。それは6つのセクションのセクションにおいて、6種類の仮装衣装によって表現された。サウス・コネクションズの仮装衣装とその値段、デザイナーの意図するカーニバルでの意味は表3-2に示すとおりである。

サウス・コネクションズのデザイナー、ショーン・キャリントンは、アフリカが「文明の母」であり、地球の歴史はアフリカの歴史とほぼ一致すると強調する。地球ができたころ、「パンゲア」とよばれる大陸が存在した。その後何百万年を経て、他の大陸は地震や火山活動、海洋の変化などにより、パンゲアから切り離されて変動したが、アフリカの位置は時代を経ても変わっていないという地球の中心論から「アフリカ」をとらえている。

表 3-2 「アスペクト・オブ・アフリカ」のセクション、値段、コスチューム・デザイナーが意図する意味

セクション名	衣装の値段	コスチューム・デザイナーが意図する意味
アフリカのプライド	大人女性 £ 55 大人男性 £ 55 子供女性 £ 45	ウガンダの中央部に住むガンダ族は最大の人口と政治的権力をもつエスニック集団である。この王国の特徴はどのクランも平等で父系の系譜であるが王権は母系をたどることからすべてのクランが王を輩出する可能性をもつものである。
ハッサニアのベール	大人女性 £ 60 子供女性 £ 50	ハッサニアの人々の起源は古代のベルベル人にたどる <sup>8</sup> 。ベールをかぶったアラビア風の華麗な踊りは女性による愛の儀礼である。ドラムの魅惑的な響きに誘われて、紺色のベールを纏った女性は、最高潮に達すると普段見せない手や足を美しく露出する。
ナイルの人々	大人女性 £ 50 大人男性 £ 50 子供女性 £ 45	古代エジプトは「文明の揺籃」であり、ユダヤ教、イスラム教、キリスト教の発祥の地として、5000年以上昔から栄華をきわめた。古代エジプトの裕福なライフスタイルを、透きとおって見える布に大胆に施した鮮やかな色の模様で飾って再現する。
マサイ族	大人女性 £ 50	古代の戦士である部族は北アフリカから発祥し、ナイル川を南下し 15 世紀中頃にケニア北部からタンザニアへやってきたと言われる。マサイ族の長老は赤い衣装と色とりどりのビーズで装飾することで知られ、富の指標をウシの数であらわしている。
女性の司祭	大人女性 £ 60	ナイジェリアからアイボリー・コーストにいたる西アフリカの赤道近くの森林地帯では、女性が神に献身し司祭となる。女性の司祭は聖なる者として体を白墨や白土で白くし、特別な魔よけで髪を飾り、特別な粉がつけられたビーズを身につける。
アシャンティの金	大人女性 £ 65 大人男性 £ 55	アカン語族最大のガーナのアシャンティ族は、18 世紀には最大の勢力を持つようになった。アシャンティ族は金鉱を支配することで巨大な富を蓄積した。金の産出と貿易で世界の多くの地域と結びついた。アシャンティの王族は 3 世紀にわたって平均 1 トンの金を輸出していた。

<サウス・コネクションズでの調査によるショーン・キャリントンのコンセプト>

#### IV. ノッティングヒル・カーニバルのなかの「アフリカ」

ノッティングヒル・カーニバルでは「アフリカ」が好まれるテーマであることを考察してきた。その「アフリカ」は現在の紛争がたえないアフリカ大陸ではなく、エジプト文明など古代に繁栄した文化や最近まで行われていたマサイ族のライオン殺しの儀礼など現代社会が失ってしまった「ア

## ノッティングヒル・カーニバルの仮装芸術が語る「アフリカ」

フリカ」である。このような「アフリカ」は、本や雑誌、インターネットで調べたり、博物館、美術館の展示資料から「アフリカ」を探し出し、コスチューム・デザイナーやバンドリーダーのイメージする「アフリカ」にあわせて解釈されたものである。トリニダードなど西インド諸島出身のリーダーやデザイナーの多くは、カリブ海にうかぶ自分の故郷の島には頻りに訪れるものの、アフリカに実際にいった経験はほとんどない。彼らにとっての「アフリカ」は意識の上の故郷、想像の故郷なのである。

フラミンゴ・カーニバル・アーツやサウス・コネクションズの事例でみたように、ノッティングヒル・カーニバルのバンドリーダーがアフリカのカーニバルにオーガナイザーとして参加し、そこでの経験に基づいて「インスピレーション」から「アフリカ」が生みだされることもある。アフリカの文化は西インド諸島を経由してロンドンに持ち込まれ、アフリカに戻ったのちに、さらに「アフリカ」となってロンドンで還元されている。「アフリカ」とは現実のアフリカを離れ、想像によって創出された世界なのである。

有末賢は、このように実態を離れて「想像されたコミュニティ」へ飛翔していく傾向が、現代の都市の祝祭にみられることを指摘する。「想像の共同体」としての民族や文化的アイデンティティの要素は「見知らぬ人々の集まり」である「都市」において活性化されやすいのではないかと示唆している（有末 2000 : 276-277）。

カーニバルに精通しているトリニダード出身のマスバンドのリーダーやコスチューム・デザイナーは、トリニダード・カーニバルとノッティングヒル・カーニバルを比較して、芸術的にトリニダード・カーニバルのレベルが格段と上であると認めつつ、ロンドンでは「都市」であるがゆえに、仮装芸術にさらに深い意味をこめ、社会に影響をおよぼすことを目指している。トリニダード系のルーツである「アフリカ」は、大都市ロンドンで大きな意味をもち、それを仮装芸術に表現することでカーニバルが活性化している様子がうかがえる。

フィールド調査から、現代でも多くのトリニダード系やジャマイカ系がロンドンという大都市でアシャンティやヨルバの文化を保持し、その宗教や習慣をとりいれながら暮らしていることが明らかになった。統計上では「ブラック・カリビアン」と分類されるウエスト・インディアンと最近数の上で匹敵するほど増加してきたアフリカ大陸からの「ブラック・アフリカン」は、「想像の共同体」である「アフリカ」でつながり、ノッティングヒル・カーニバルはこのふたつのアフリカをつなぐ「ブラック・アイデンティティ」あるいは「アフリカン・アイデンティティ」を構築する装置となってきたと言える。

## おわりに

本稿ではノッティングヒル・カーニバルの仮装パレードに見られる仮装芸術における「アフリカ」の文化をアレンネ＝ディトマースの論文および筆者の2004年から2006年にかけてのフィールド調査で得た資料と知見を提示した。仮装芸術にみられる「アフリカ」はこれまで英国で評価を受けてこなかった豊かで、繁栄した「アフリカ」である。「アフリカ」をカーニバルの仮装芸術で現代社

会に提示することで、「アフリカ」を共有する人々のアイデンティティを構築してきた。

この「アフリカ」は現実のアフリカではなく、ベネディクト・アンダーソンが「国民」の概念としてとらえた「想像の共同体」に通じるものである（アンダーソン 1987）。トリニダード、ジャマイカ、アフリカ大陸の各地域など地理的に離れた地域を故郷とする人達がロンドンに暮らし、「アフリカ」を共有して一つのコミュニティを形成している。

ノッティングヒル・カーニバルでは、コスチューム・デザイナーやバンドリーダーの「アフリカ」に対する解釈が加えられ、多様な芸術によって表現される。故郷「アフリカ」の文化はトリニダードをはじめとする西インド諸島を経て、世界の大都市ロンドンのカーニバルにおいて開花している。ノッティングヒル・カーニバルは、「アフリカ」をルーツとする人達をつなぎ、「ブラック・アイデンティティ」あるいは「アフリカン・アイデンティティ」を構築する装置となろうとしてきたのである。

## 注

<sup>1</sup> 英国の国勢調査は 10 年ごとに行われるが、2001 年の国勢調査では、英国の全人口が 58,789,194 人で「ブラック・カリビアン」は 565,876 人で全人口の約 1%を占め、エスニック・マイノリティ人口の 12.2%を占める (<http://www.statistics.gov.uk>)。

<sup>2</sup> 「グランド・カーニバル・コスチューム・スプラッシュ」はノッティングヒル・カーニバルの一週間あるいは二週間前の土曜日と日曜日にアレクサンドラ・パレスで開催される。この催事は 1958 年におきたノッティングヒル騒擾事件の翌年、ウエスト・インディアンが差別に対して暴力で抵抗していた事態に憂慮したクローディア・ジョーンズが、彼らの結束のためにはじめた「ウエスト・インディアン・ガゼット・カリビアン・カーニバル」の伝統をひく室内のカーニバルである。

<sup>3</sup> ガブリエル氏とは 2005 年 8 月 17 日における「キャラバッシュ・カーニバルクラブ」で聞き取り調査を行なった。ガブリエル氏についての情報は、聞き取り調査とその際に入手した“CARL Gabriel Carnival Artist”による。

<sup>4</sup> ライオンを殺す儀礼は主に <http://www.bluegecho.org/kenya/tribes/maasai/eunoto.htm> を参照し、聞き取り調査の内容と整合させた。

<sup>5</sup> 聞き取り調査をもとに、<http://www.marshall.edu/akanart/asaf.html> で確認した。

<sup>6</sup> アシャンティには王権の象徴として「黄金の床机」(Golden Stool) という木製で黄金の装飾がある椅子があった。この椅子に座るものは、アサンテヘネ (アシャンティ連合王国の王) と呼ばれたが、実際には腰掛けるものではなく、王権より神聖視され、常に王座より高く安置されていた。この床机は国家統一のイデオロギー神話となっていた (宮本 1997:425-426)。

<sup>7</sup> スビアはエジプト南部アスワンからスーダン北部ドンゴラにいたるナイル川沿岸流域に居住するナイル・サハラ語族系の民族で、かつてはバラブラとよばれていた。6 世紀にはキリスト教を受容し、王国を築いたが、11 世紀以降北からのイスラム化、アラブ化により、16 世紀にはキリスト教の王国も滅亡し、ほぼ全面的にイスラム教徒になった。アスワンハイダム完成以降、1960 年代に多くのスビア人は故郷を追われ、ハルツーム近郊などに移住した (文化人類学事典 p.566-567)。

<sup>8</sup> 名古屋大学の嶋田義仁教授によると、ハッサニアはサハラ砂漠南部に分布するアラブ系民族で、通常「ムーア人 (モール)」とよばれる。彼らは必ずしもベルベル人に起源がたどれるとはいえない。

引用文献

- ALLEYNE-DETTMERS, P. 1997 "TRIBAL ARTS": A Case Study of Global Compression in Notting Hill Carnival. In *Living in the Global City: Globalization as Local Process*. John Eade (ed.) London: Routledge
- アンダーソン, B. 1987 『想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行—』白石隆、白石さや訳、リプロポート
- アンチオーブ, G. 2001 『ニグロ、ダンス、抵抗—17～19世紀カリブ海地域奴隷制史—』石塚道子訳、人文書院
- 有末賢 2000 「現代の都市空間におけるメディアと祝祭」『生活学第二十四冊 祝祭の100年』日本生活学会編、ドメス出版
- COHEN, A. 1993 *Masquerade Politics: Explorations in the Structure of Urban Cultural Movements*. Berkeley / Los Angeles: University of California Press
- 遠藤保子 2001 『舞踊と社会—アフリカの舞踊を事例として—』文理閣
- FOSU, K. 2001 *Handicrafts of Ghana*. Kumasi: Amok Publications
- 石川栄吉、梅棹忠夫、大林太良、蒲生正男、佐々木高明、祖父江孝男編 1987 『文化人類学事典』弘文堂
- 宮本正興 1997 「王国の抵抗<アシャンティとマダガスカル>」『新書アフリカ史』宮本正興、松田素二編、講談社現代新書
- ルギラ, A. M. 2004 『アフリカの宗教』嶋田義仁訳、青土社
- サンカン, S. S. 1989 『我ら、マサイ族』佐藤俊訳、どうぶつ社
- SEWELL, T. 1998 *Keep On Moving – The Windrush Legacy – The Black Experience in Britain from 1948*. London: Voice Enterprises Ltd.
- Adinkra Symbolism (1969) Prepared by Prof. Ablade Glover, Artists Alliance Gallery, Omanyeh House, Accra
- CARL Gabriel Carnival Artist
- <http://www.bluegecho.org/kenya/tribes/maasai/eunoto.htm>
- <http://www.marshall.edu/akanart/asaf.htm>
- <http://www.statistics.gov.uk>